

葛名御史

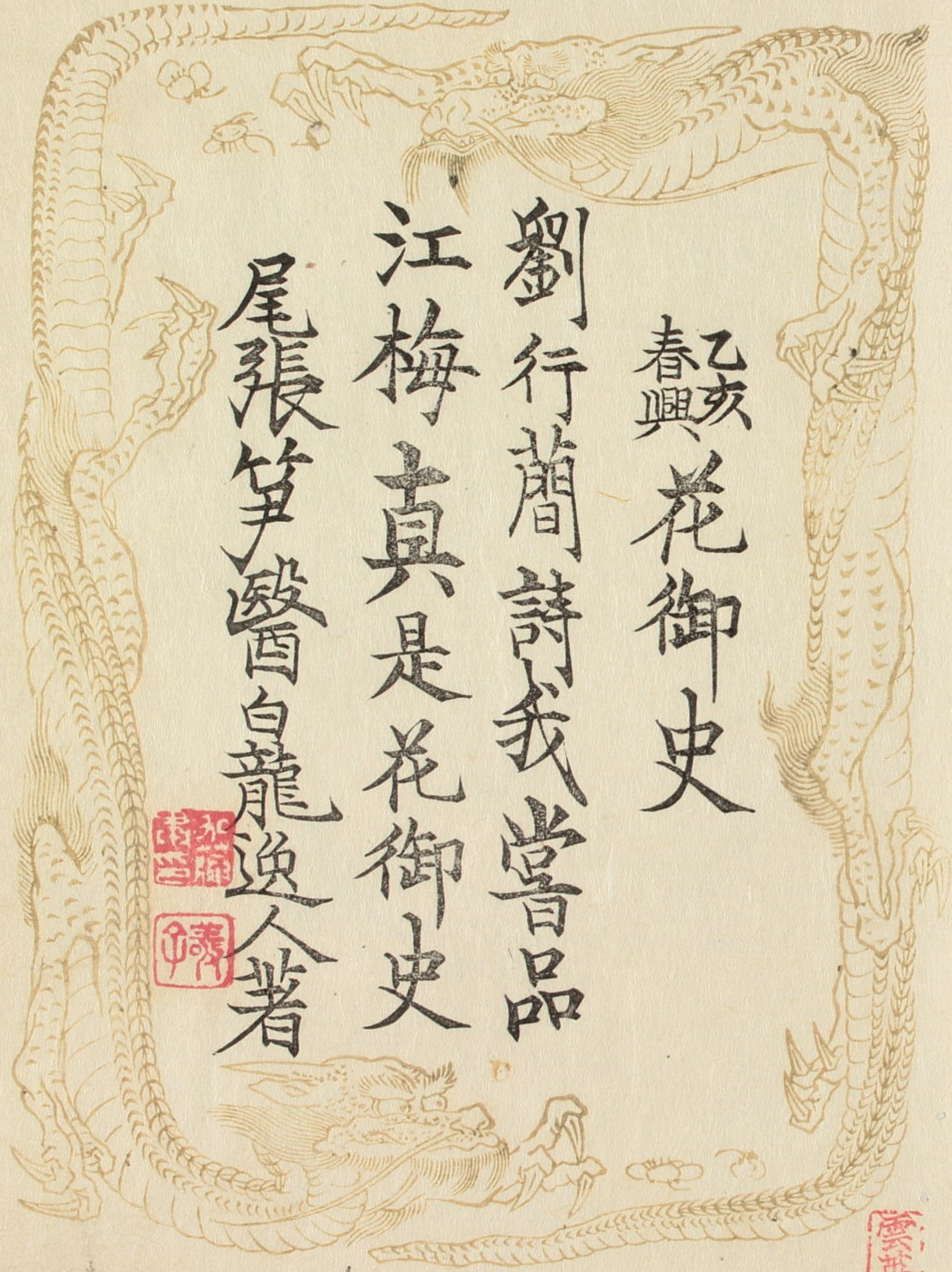


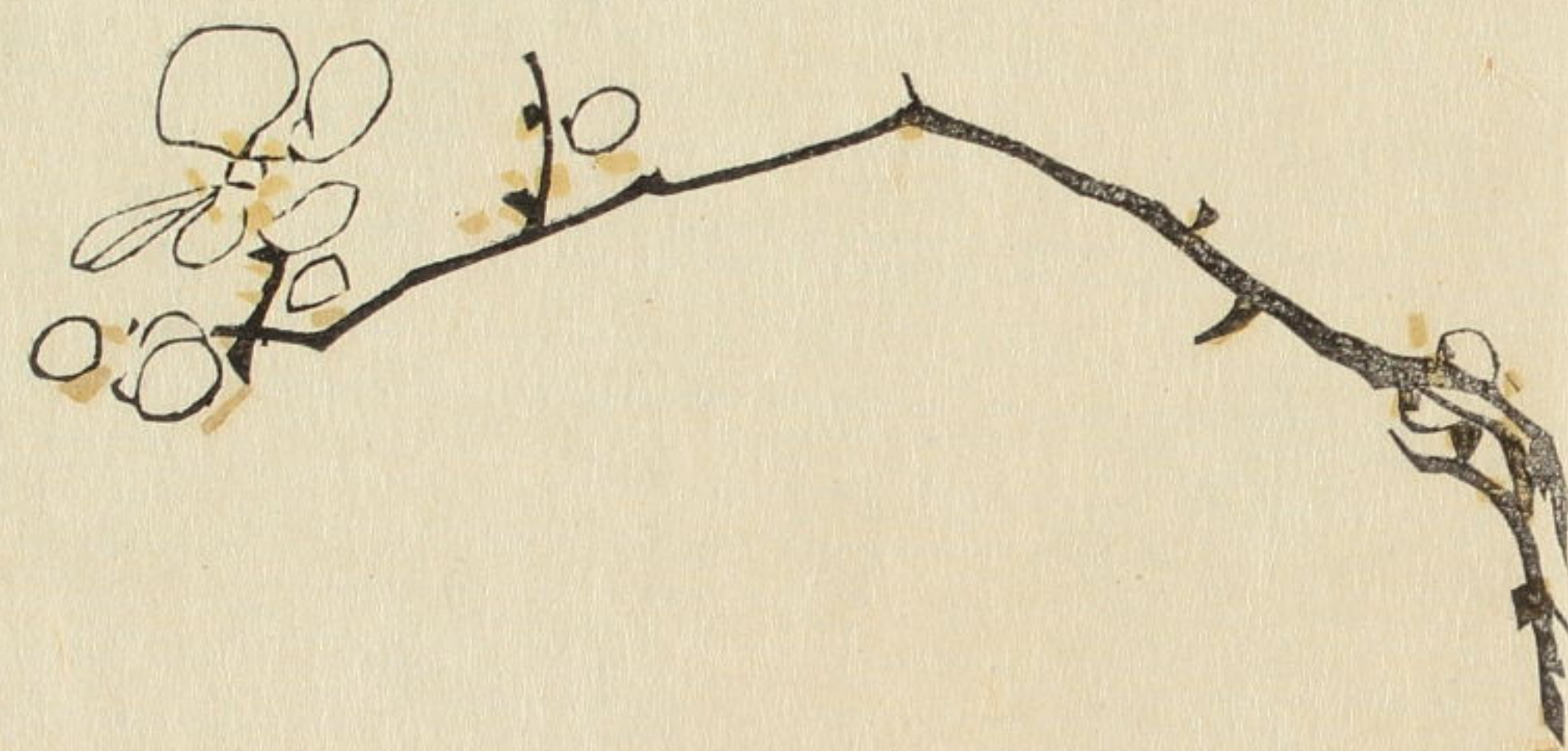
九用

石橋

乙亥春興花御史

劉行簡詩我嘗品
江梅真是花御史
尾張笋醫白龍道人著





歌仙行

逸人

梅の香を雲ふく風も日の光め
雀の歩りを移す 若草 橘羅
袖のくけの目と拾ふらん 松樹
家あふく酒をえ透す 人
黄白の月を海を越え 桃堤
紫を青風送る 新風 さを

漣のさざめく風の中 羅
簾毛のあけ 坂本の人 樹
先くも 孫喜ひ 昔の乳 人
氷柱乃 軒ふさる 松の葉 堤
朝日如日和をさす 鳴り 赤く世
ほくす 込たる袖玉 章 いきち
加茂川のあけ 奴のあけ 後 也
豆腐肉くけ 姐板の上 世

二
第目のうへふを散うる
盛久殿ハ 睨取の月
行ハ水雲ハ 夢とぬめし
舟ハ 便をいそぐまはる
ちねむき満ちる垢の樽箸
鹽ハ 雨をあける芭蕉葉
目ハ 先ハ 濤の音をきき
猿の子ハ ねふ夕暮

樹 人 羅 ち 樹 人 羅 ち

姉ハ くと 風をとりけ 縁層
天狗ハ ちうき 山伏ハ 顔
笠古き 草履の解ハ 杖ハ ち
龍ハ 尾ハ 蛇の解ハ 赤鯛
とさく 片空 送り 柳ハ ち 風
あ 傾城ハ 橋 浩の月
切賣ハ 西瓜 表ハ 色白
琴 陣ハ ちのち 灰汁 桶

三
人 羅 樹 ち 樹 人 羅 ち

樹の樹のすゑあふ枝る芥えと
 土は車の油たしあき
 嘆尔墨忘れたる茶はこぼし
 此娘宮の君はうゝとれ
 ハ重霞雲の初瀬うゝとれ
 春のふちたり 莖漬の水
 樹 羅 人 ち 羅 樹

家作の大君来ませ智るせむ
 蓬萊ハ梅の山路を 鴉 不轉
 咲みそ風成含めり花の勢 快臺
 巢や鳥のふとさき 其の子 塊翁

馬の鞍や柳の枝を
 賞の藪くちむ 初日 新 宮 麥里

橘羅	くし	桺	まのり	残	唯	くし	くし
桃堤	梅	う	考	や	窓	ふ	陰
呂洲	う	良	家	を	く	所	さ
古貺	弟	累	の	隙	中	も	古
いきち	立	と	雅	ハ	桺	ハ	風
路大	身	ふ	別	し	業	も	あ
赤世	管	弓	や	鈴	の	細	ひ
大雅	歌	さ	く	や	戀	く	の

探水	東	の	く	ち	ふ	梅	冬	咲	く	宿	の	ま
さそ	あ	の	風	ハ	雪	ハ	重	垣	や	松	大	路
樵夫	古	里	ハ	う	り	ハ	須	ハ	戀	月		
松樹	梅	若	菜	是	等	ハ	庵	行	地	走	子	

遠ふて来る兒や
逸人

道草や
こぼれ草

又音
歌仙行

下巻
桂丸

簾より一人落しぬ春の月
柙 動の寸 野蛙の多
塗楊し雛の法ある隣揺て
琴の隣りたけたりなり
漣の移るるや山を隅
夏は草葉の音はつちり
、 、 、 丸 逸人

瓜むけの破れ嵐の現る
兄乃便とて 梓女
ぬくへ涙を流す時雨
冬を来ふむきふ 葱草
襦袢のきききき 杉の鳴き
花子ほちく 目元を居る
三日月の影は雲の影
落栗の音は後陣に
、 、 、 人

四輪車ふりまけてり萩すね、
熊の殺る油とる壺、
茶の香のうらちふ鼻の先、
陽をけむ掌の庵、
春雨の余波を人め小田おれ、
くねり〜と折ふ橋のふ、
残り機山の煙に夕来る、
白乃端々米借り此より、
丸

名をうけ軒を水鶏の叩らん、
葛めふまゝなり忍ぶ此頃、
高砂の松も昔の恋ふあれや、
浪の轂をふりて世の中、
仮初め酒う命を神儒佛、
すゑり〜〜〜試の坂人、
雲をため夕の誓けいやまより、
庭をひり新め川風、

白萩尔下よりをれと詠抄を
 くらと 既申尔太師冠老来
 不奉公者如子悪く悪くあり
 花の七日せはるるくら家
 逸人う賞ふといそくつて
 耳ら我もゆた 春の曙
 、 、 丸 、 、

李白一斗
 詩百篇
 逸人子餅
 發勺孱

梅樹逸人画讃





逸人并画

足袋をはきて
日の暮ぬ柳哉



又音

歌仙行

洛

金菜

ふの日は簑着を来るや田の賣
松の隣——陽の宿 逸人
破山如うとまは春残惜らる 菜
き、今終りに 陽の魚をまの顔 人
飯釜も今見分る 磨りあり 菜
と年い 酒を出来味のふた 人

九
 かろくとくの本さうふ秋の風 菜
 硯さうとく恋おものう記 人
 滄うけそ心整りし落羽織 菜
 糸車賣お咄掛し 人
 野驛も隙おきあたり 菜
 土お不らりのころは早桶 人
 夕夕のちらりと竹をさす 人
 おせ利 又と志ある人 菜

紅葉鮎 菜
 三刻はうり日枝おま向ふ 人
 身乃憂さうはるふふふ 人
 今も廓おのころ山吹 菜
 お困さい雀の親子とうり 菜
 智月白葉お膝のちびさき 人
 錆銭のくすり付たる崩 人
 志たうお汐のさうとく音 菜

馬士に喧嘩の尻どうちまらせ
後散れ目貫光り尊を
日の新し横糸節遠蟹子厨子
中々束の子や荒れどふに
柵尾へ虫の修業にうほあり
たひふれまの茶壺ううふ
腰骨のまうぬるを酔津重
霧をううと月や登るを

菜 人 人 菜 菜 人 人 菜

海色にそけきあそび笑ひ世を
音弦入るる高麗笛の音
仲々まことやめ若衆あり
猫の意するをやううに
何家も電線多きは花の葉
金心けある菜種梅の樹

菜 人 人 菜 菜 人 人 菜

白龍道人并画



土

博浪の

英名を

汲絶

春乃水



江の上や梅の花に	ふらふらと不二	春風や山あかり	くち白く	夕陽あけ	賞
星も	桃の	水の上	折る	歌ふ	伊勢
椿堂	李東	淇石	百頁	宗古	丘高
	交齋				

素拵——馬眼——對馬 耳醉
 花風 風尔 花乃ハ 花乃 戲蝶
 山風也 柳花 下 花乃 雨柳
 香もけや 岨花 花乃ハ 布席
 芽をとりて 大々 花乃 来車
 一筋 尔 水ハ 花乃 一 盞
 吹たけの 風 花乃 誘帆
 一 花乃 花乃 夕日 三千雄

東方曼倩

延壽

盜桃

其謀

乃威



芳華園逸人画讚



森しも見ゆる里に柳の角

洛

雪雄

百姓のふくともやうめのみ

金菜

如月やもて宵あけの月ハ去

管鳥

嵯峨山ハ朝やうとも暮らう

菊人

是れより皆はかり田に畦

十丈

一二反持てハ若菜の長者うふ

梅價

あをむけハ菜の散む 移 笠

白糸

聖なる家柳を何う人の来

春人

十人如狗ふりあやめ 梅の菜 笑九

芽野出て松山それハ春の雨 杜蓼

夜横やちんさふ松を越てり 素童

息もふま婦 伯母や娘の夢 蒼虬

夕ぐれハ挑もさうハ寒き菜

浪華

井眉

隙人う来々 隙はふす梅の菜 長齋

初あけハ苔ふさむあり梅の菜 星譜

散癖うひとふさふハ菜の肉 扇暑

唇めくくきくもや絳月
茎みぬくちひくまぬ庵 畠
初室や賞あぬるもあし
さくしさを庭ふ持たる櫓へ
若草ふちありけしき 日の出づ
其の歌乃そふに持たりい
尋ふけきけ競ふ中も其のそ
さくしき歌ふ水走詠もの
井左

松隣
万和
瑞馬
米彦
公路
屋烏
宝鼎

莖みぬくちのきぬ庵 畠 万和

初空也 寫來每多如此

米彦持唐書

若草の志ありけり
日の出づ
公路

其の趣乃愛に括たりい
せりりり
屋烏

予が昔に競ふ中も其の字

さるる鯛其水走詠もの井左

午酌うの字詠ふきりい鳴蛙 草齋
 秋野ふさる。毎月ひや梅の香 外海尼
 夕くらぬふ幅う付たり 杉良
 いづもの有解る 伴爾 獨り 奇調
 西月を 紙衣を 梅尔 列 蜂友
 賞や下戸といふも 三津人
 冥暗ふ七白の紙を 目 奇淵

取
取
不
字
。 毎
月
ひ
や
梅
の
香
外
海
尼

夕々永
幅
付
り
り
杉
良

いづれの有様と申され候哉 奇調

西月夜 紙衣を梅尔列衣
蜂友

賞や下戸といふ事多し
三津人

冥暗尔七日の地を日々暮る
奇淵

折のうゝ伐孫くさく山さる江戸 完来

聖抄ひふ渡りたるものつ橋 成美

人うろ福の動うに 郷月 笠齋

相模や神垣外に路の聲 可笑

管の杉の向ふに 酒屋の 国村

山吹赤岩のさうりそ二瀬うさ 松夫

笛の師の遠を結うひさう 春のめ 可磨

正月の脈はくろくや 葵の香 竹馬

日せうらふ笠まきそ丁のり糸の 樗窓

生酔の寝あそぶ 柳うさ 鷺雪

散り様白ふに花をあうぬへ 道彦

梅の月柳ふすれに水寒し 長門 羅風

初春やものさしをあるあうりふ 肥後 一壺

花の夜ふけうを味らぬす水の音 備前 幽雅

梅咲も谷戸のやうにや炭俵 讃岐 南之

ものゝ新緑をさすやうにや 薩摩 琴洲



永以有藝
 人何世藝
 吾為竹醫道
 世俗塵埃

遊
 春
 過ぎ
 時も



梅樹逸人


おれこれをもよおし岸の梅 大津 于當
 大やういふはれもちり梅の字 苗堂
 梅は月一本ふりて 石鹿
 梅の香ふ行高たる 旭 桂良
 其の戸をきくも其の月 一堂
 其のむらやうも其のま 宇洋
 夕のけや梅ふ散る 千影
 あらうきもの 喰ふも 鳥頂

舞ふ

胡蝶

夢の

胡蝶と

遊ぶ



梅樹逸人并画



彌骨

松の戸や風いそぐ糸とくくはる

和泉 紫笛

何れにあり内小は居る春の山

明石 千尋

春あけのさくらも 東の所

池田 呉老

馬の鈴よくゆりたてと

桃柳 近江 破文

梅の月其後明き

棟日永 吞龍

水歌の浦糸揺ふうらめしき

遠江 起石

丸く取喉てぬくぬくはる雨

河内 未紀

夢さるる日のもれそる柳とくくはる 宝雨

年毎糸折とわきとくく火のそね 丹波 武陵
 鏡てあゝ下駄のりそも花のま 五柏
 山も人も歩けとまの風 梧朗
 新山や雪鳥のうらの 遠歩り 万堂
 芳るもや松いふれははる 丹後 桃之
 聖鴉いのとまきものそ 出雲 花叔
 雪ふるりたる 水の 舎り 系 浦安
 湖の行ともくく来と海の風 有秀

鎌月下句
おさうハ

山吹や灯らるるのすぬ 宇治 方成
 花尔七取 柳尔五取 兵庫 玉津
 芽野山雪の中より ちる 播磨 田實
 雨ふさくまのなけそ 浪華 祇白
 多あや世残のきむや 梅の枝 長崎 舉江
 花うちふも水梅さく山の歌、 祥木
 水上ハ 瀧とあふう 尾道 藏六
 琴弾て人のあけとや 伯耆 年のくれ 沾雪

備月下旬 鯨子 あり 荷う 之 する 一 糸 江 常陸

鶯や ちみ 菜も 席の 主 生 あり きい 閑 齋

海より 杖を 持 たり 其の 山 豊後 杜 由

大船の みより あり 是 水 深 あり 弗 水

誰子 鳴 也 山 家 の 妻 も み あり 智、 仙 洲

首より 杖を 持 たり 何れ 任 せ たり 某 南良 緩 駕

備月 下旬 ゆき くと あり 煙 也 狹 屋 某 南部 谷 雄

賞、 妻の あり とも 思 へ れ 也 行脚 北 尼

湯を 我 踏 び たり 小 笠 原 三河 仙 雀

妻も 春 日 白 衣 也 野 白 け 甲斐 浸 々

備月 下旬 嵐 也 ち 彩 歌 也 たり 冬 公 毫、 重 行

あり 日 明 風 也 妻 也 あり 流 路 也 日向 真 彦

人 あり ち ち 老 也 ち ち 月 様 加賀 車 大

ある 時、 鐘 ぶ っ たり 田 の 畦、 固 来

年、 ち ち ち ち あり ち ち ち ち の 枝 若狭 雲 居

其の ち ち 鳥 鳴 け ち ち あり ち ち 渡 千 里

是る月のあけぬ散るる家 下総 蒼峨

あまの氣も寒しうき 古彦

ひやうきも狐の面や朝也 鬼咬

あまの十五夜わたりての云 青岱

あまのや白の下より春の草 皎月

漢月名 此縁より隣も持たず 辛の月 三顧

日 鈴叩 茶後ハやれておの月 但馬 月波

日 夜はよりふすまうて 傳はくし、三津

砂瀬湯 夜酒のあけや 夜々毒 石部 亞溪

夜の明と香を以てけそ 藪の梅、志宇

川越て我家より 押 彦根 素律

折て屋の枝うちさし 梅の茶 土山 虚白

此茶に推る香をき 聖梅 美濃 尚摩

あまのうしと待てるの道 飛騨 儲史

世に後る日もあやちうふふ 五芸

竹取の枝折茶と花すみ鏡、東右

雲尔^{信濃} 寝る宵へゆく 蛙うふ 久亭

鶯やうも 初音の十五日 素磔

梅うもや河まりよりれい^阿 伯先

萍うも^{伯先} 花むる夜や^{伯先} 月

^{臘月ト白}一盛^{ふたえい} 高尔^一 醉々里 奥山家 徐涯

日 初音^日 けうも^{初音} 雪の^雪 鳴う^鳴 三津良

ふ^{津輕} 蛙^{津輕} びい^{津輕} 雨^{津輕} 衣^{津輕} 初蛙^{津輕} 歩牛

ふ^{上野} 鳥^{上野} 鳴^{上野} 衣^{上野} 室^{上野} 花^{上野} 家^{上野} 確令

踏^{仙臺} 苔^{仙臺} 白^{仙臺} 白^{仙臺} 蛙^{仙臺} 乙二

との^{仙臺} 星^{仙臺} 曳^{仙臺} 日暮^{仙臺} の 几巾 三及

雛^{仙臺} の^{仙臺} 衣^{仙臺} 恨^{仙臺} 衣^{仙臺} 衣^{仙臺} 冥々

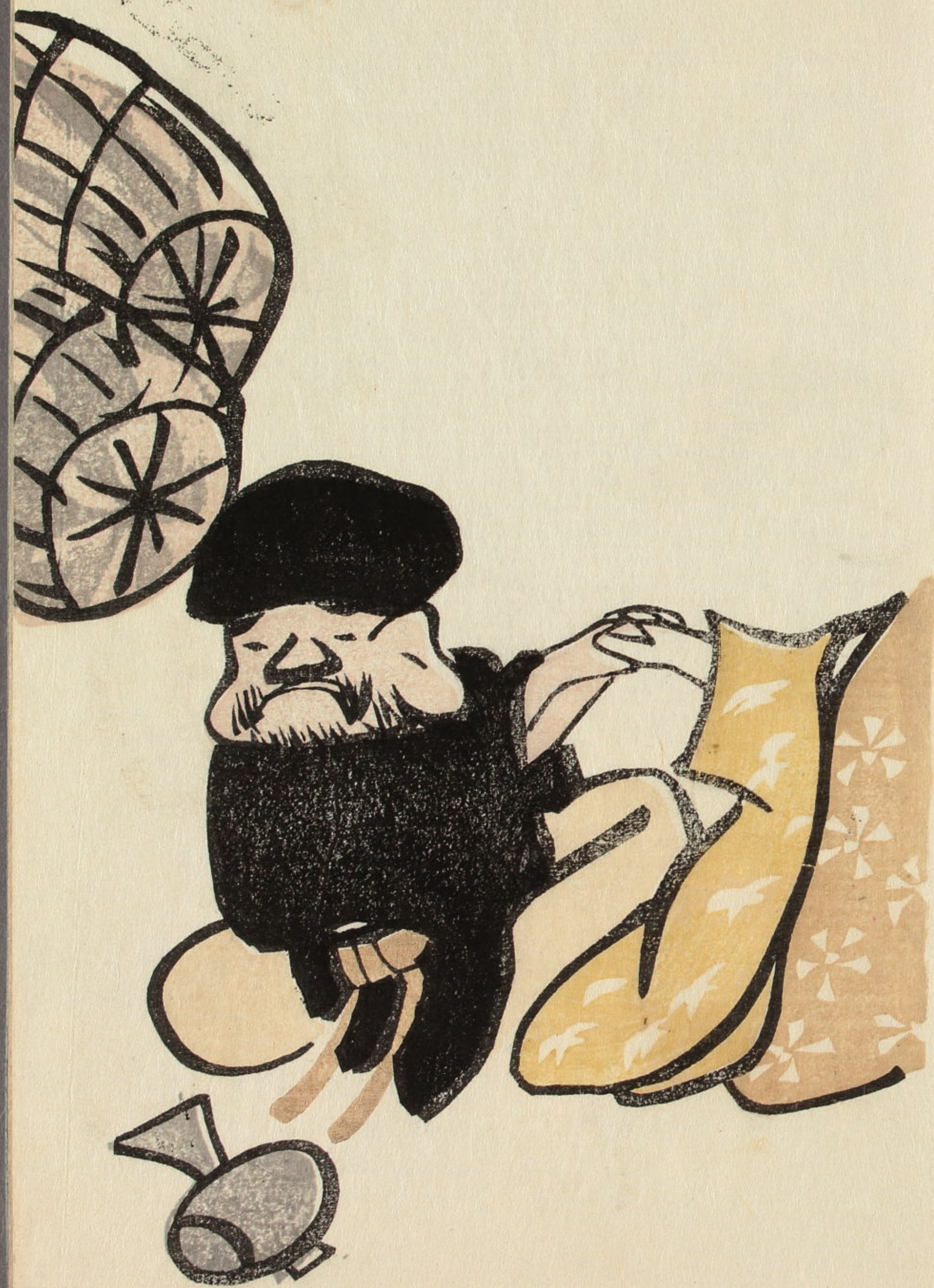
鶯^{出羽} の^{出羽} 鳴^{出羽} や^{出羽} う^{出羽} も^{出羽} や^{出羽} 年^{出羽} の^{出羽} 衣^{出羽} 楓二

散^{安藝} る^{安藝} 花^{安藝} の^{安藝} 隙^{安藝} や^{安藝} 考^{安藝} 衣^{安藝} 衣^{安藝} の^{安藝} 飯^{安藝} 西坡

傘^{鹿門} の^{鹿門} 端^{鹿門} や^{鹿門} つ^{鹿門} く^{鹿門} 美^{鹿門} の^{鹿門} 山^{鹿門} 鹿門

妻^{玄蛙} の^{玄蛙} 白^{玄蛙} 衣^{玄蛙} う^{玄蛙} る^{玄蛙} 衣^{玄蛙} 初^{玄蛙} 拂^{玄蛙} 玄蛙

^{臘月ト白}我^{信濃} 猫^{信濃} の^{信濃} 衣^{信濃} 衣^{信濃} 軒^{信濃} の^{信濃} 衣^{信濃} 篤老



大和文化萬年之十二年歲
在乙亥春正月朔日

尾張外史加藤肅字敬子
思永堂逆人慢選



甲戌年中梅樹逸人所著書目録

集冊部

文音親友録 秋の調 銀河集

虫の聲 初時雨 小春風

摺物部

墨梅画 人物小摺 倚机人物

華の世 唐紙二枚摺 冬日即事

雪此興 三百五十四日 福多内

